

氏 名	渡 邊 妥 翁 子
学 位 の 種 類	博 士 （美 術）
学 位 記 番 号	博 美 第 290 号
学位授与年月日	平成22年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉 1、2、太郎 〈論文〉 モンモンとした絵画
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教 授 （美術学部） 坂 田 哲 也
（論文第1副査）	〃 〃 （ 〃 ） 佐 藤 道 信
（作品第1副査）	〃 准教授 （ 〃 ） 大 西 博
（副査）	〃 〃 （ 〃 ） 齋 藤 潤
（ 〃 ）	〃 講 師 （ 〃 ） 齋 藤 芽 生
（ 〃 ）	〃 教 授 （ 〃 ） 佐 藤 一 郎

（論文内容の要旨）

本論文は、筆者が主観的な体験を通して、芸術において考察した一つの見解について論じたものである。すなわち、「普遍的な芸術論」ではなく、主観的なところから見えてくる滑稽な「モンモンとした芸術」についての見解を、現時点で論じた。

本論文は、「モンモン」（ここでは規則性のない一種のカオス的な現象として捉える）とは何を意味するのかを、主に芸術的観点から、そして、哲学や科学等の客観的な視点からも包括的に論じ、筆者が執着する絵画と関連づけながら考察を行った。

第1章では、筆者の表現における根源的要素が凝縮された「マスク」作品の制作経緯から、「身体性」を意識した「マスク」の表現と、既存の形態に守られた「絵画」との関係性について論じた。

ここでは、筆者の表現手段が、平面的な絵画から立体的なマスクへと変容した経緯、また、筆者にとつての「マスク」とは、一般的解釈の「仮面」ではなく、自身の価値観から由来する独自性のある作品であることを明らかにした。

その「マスク」とは、自分の抱えている滑稽な問題を扱い、モンモンとしたカオスから生まれた作品でもあり、それは、最終的な形態ではないことについて論じた。

このように、第1章は、「絵画中心の自分の価値観」の外に出るという行為を選択した筆者の意志を、具体的に指し示すために設けたものである。

自分の枠からはみ出た時、摩擦や違和感が生じることを、無意識に意識しながら創作した行為が、「マスク」であった。すなわち、筆者にとって「絵画」は、故郷である意識に基づいて制作した作品であるのに対して、この作品形態の特徴は、エキゾティシズムなのであろう。そして、異境であることから感じる「エキゾティシズム」に効用があるとすれば、異境と故郷がぶつかり合うことによって、故郷の本質に迫っていくことではなかろうか。

筆者にとって、「故郷の本質」とは「絵画の存在意義」である。その存在意義を見定める作業が、第1章で扱った「マスク」作品の制作だったのではなかろうか。

第2章では、筆者の基礎的な絵画観について論じた。ここで論じた内容は、筆者自身の絵画に関する経験、影響をうけた作家との関係性、また、筆者の絵画を描くモチーフについては、生身の人間には求

めていない思考、実際の作品のみが放つ魅力である。そして、画家の描写とカタルシスの観点から、「絵」とは、個人の記憶によって善し悪しが判断される流動的価値観でも成立することを明らかにした。

このように、第2章で論じたことは、絵画にまつわる実際の経験である。その事例を振り返ると、経験なくして実感は伴わず、表現は形成されないということが改めて理解できた。

また、絵画とは、生身の人を媒介することなく、過去および他者との擬似的なつながりを持ちうる手段でもあること、そして、筆者の世代では共通している「油絵が西洋画であるという意識」がないこともいえるであろう。このことは、筆者の現体験のなかで、西洋を認識する前に、すでに油絵が存在していたという事実からの認識でもある。

絵を描くこととは、現実においてはマイノリティである。しかし、マイノリティとしての芸術世界の中では、油絵はマジョリティである。筆者は、マイナーな芸術世界に対してのみ、マジョリティとして向き合う意識を持っていることも、本論で理解することができた。

第3章では、芸術の解釈に共通性のある哲学者達の思想と、筆者のいう「モンモン」との関係を以下のとおりに見出した。

すなわち、「モンモン」とは、ソクラテスの思想からは理想を貫く強さがないこと、プラトンの解釈からは魂を患ないための措置であること、アリストテレスの思想からは形相概念にそれが見出されること、ルソー的解釈からは自然な本能が誘発させるものであること。また、ショーペンハウアーの解釈では人間の本質にある非合理性であること、ニーチェの哲学からは慣習的な道徳や良心から逃れられない臆病者の持つ思考形態であること、デカルトの思想からは精神と物質からなること、そして、カントからはア・プリオリとア・ポステリオリの融合を試みる思考からなるものであると考察した。

筆者の目的とは、「モンモン」を作業化することで、科学的（Physical）法則性による「知覚できる現象界」と非科学的（Meta-Physical）「もの自体の世界」を融合することにあることも考察に加えた。

このように第3章では、各哲学者の思想を、筆者自身の問題と関連づけ展開している。本章で扱った哲学的思考からいえることは、筆者が抱えている問題とは、哲学者を含めた人類が、筆者とは違う形態であっても、常に考えてきていたという事実である。つまり、筆者の考える「モンモン」とは、自己定位に関する普遍的な問題に関わっていることを確認した。

第4章では、筆者の絵画の制作過程（プロセス）について、科学的な側面から客観的な分析を試みた。その視点は、自身の制作を実例に、突然異彩を放つカタストロフィー（驚異の反転）や、絵画の保有する部分と全体構成（自己組織化）の分析、また、「現在の制作」「モンモン概念図」「筆者をとりまく表現形態」など、絵画における思考概念の図式化である。このような視点によって、本論文全体で論じている主観的な「モンモンとした問題」の客観化を試みた。

第5章では、筆者の表現で生じる「滑稽」とは、一種のマイノリティ思想から生じ、そのマイノリティ意識により、自己満足かつ自己陶酔的な芸術になること、そしてそれが、自己を表現化したルソーの自伝に通じることを明らかにした。

芸術は、偽善の論理に身を委ねるべきではなく、道徳的価値観では成立しない。そこに一種のモンモンが生じることとなる。

また、芸術表現は、「美、もしくは巧さ」の基準では中庸（アリストテレス的）にあり、本能的な問題と現実社会の問題の両方からのせめぎ合いから生まれる。したがって、芸術表現は、自分と世界との関わりを極める行為であり、ここにもモンモンが存在する。

そして、数学的な視点から、自然界に存在する黄金比は、必ずしも絵画の魅力の要因ではないこと、自作品の「マスク」と「絵画」は、トポロジー的な見方からは同一視できること、さらに、客観的な科学と創造的芸術には、共通点があるという考察も加えた。

このように第5章では、現在の自分が向き合おうとしている「芸術表現とは何か？」という問題に対して、実際の「私」が、具体的に考えていることを論じた。ところが、論考を進めて行けば行くほど（＝

他者に伝えるという行為)、相反する「伝えたくない意識」が露呈するというパラドクスを抱えた一番滑稽な例となった。このことは、本論で扱ったルソーの告白のなかに見るものとかかなり近く、格好の悪い問題である。しかし、一方ではここで論じた内容によって、筆者がこのような格好の悪いものが付きまとう芸術に、価値を見出している事実が改めて浮き彫りにされ、筆者という「一作家」が抱えるモンモンとした思考形態が、少し客観化出来たように思う。

「結章」では、本論文の全体を通して、筆者が考察してきた問題を振り返ることとした。

本論を執筆することにより見出したものは、モンモンとした思いの根底に流れている、世界に対する実感が欲しいという筆者の意志である。それは、「これが世界だ」と他者から教わる「常識」ではない。常識一般という言葉の持つ価値の強制力は、思考停止の状態に陥らせる力となる。思えば筆者は、そのことが常に実生活において気になっていた問題であり、この意志を「モンモン」というキーワードから考え、浮かび上がった断片が、この本論文で示した作品や思考形態となっているのであろう。

最後に、「絵画」というもう一つのキーワードについて述べると、絵画という文化の根底にある「形」と、創作活動に至る根源的な「考え方」こそが、「伝統」として、筆者にも受け継がれている。そのことについて考察すると、筆者は、絵画という形式そのものが、「伝統」か否かを問題としてはいないことに辿り着く。つまり、「絵画」を描くことは、「魂」の問題なのである。このことを、本論文の帰結とした。

(博士論文審査結果の要旨)

「モンモンとした絵画」。一見ふざけたようにも見えるタイトルの本論文は、筆者が抱える「モンモン」とは何なのかについて、哲学や科学の視点を導入しながら論考したリアリティの強い内容となっている。筆者が自己を見るキーワードには、じつはもう一つ、モンモンとする自分を笑いとばす「滑稽」があるのだが、ここではある意味逃避的な「滑稽」を封印し、真正面から「モンモン」に取り組んだ秀作となっている。

筆者は、一貫して「絵画」に強い執着をもっている。したがってここでの「モンモン」も、絵画のあり方をめぐる問題であり、論点も「モンモン」と「絵画」の二つが軸となっている。「絵画」への「モンモン」の始まりは、大学入学後。幼時に迷いもなく始めた「絵画」に疑問を持ち始めた筆者は、暗黒舞踏との出会いから舞踏を表現行為とし、身体性への意識から立体作品の「マスク」を制作する。しかしこれが逆に、外から「絵画」を自分の故郷として再認識することになった。筆者の作品は、きらびやかな宝飾を思わせる描き込んだ作品が多いが、そこにはレンブラントの「光と影」への強い共感もあるらしい。

しかし「モンモン」は、表現以上に「絵画」のあり方、さらに他者や社会、あるいは自身に対する自己定位をめぐる葛藤でもある。それを考えるために、筆者は哲学者の思想の中に、モンモンの意味をさぐる。ソクラテス、プラトン、アリストテレス、デカルト、ルソー、カント、ショーペンハウアー、ニーチェら、そうそうたる哲学者の思想の、何がモンモンに当たるのかをさぐった第3章は、読みごたえがある。しかしこの作業で筆者が得た最大の収穫は、誰の思想が自分のモンモンに近いかわかり、彼らもみな形は違っても、人間や自己存在の定位をめぐるモンモンとしてきたという事実を知ったことだった。ここから筆者の思考は、他者や周囲、社会や常識との間の呪縛や強迫観念から解き放たれ、筆者なりの解答に向かって動き始めているように見える。筆者が一定の共感を示しているのは、アリストテレスの「中庸」とルソーの『告白』である。バランスを説く「中庸」と、アピールより吐露が逆に共感をよんだ『告白』。つまり、合わせようとし、認めてほしいと求めることが、逆に「モンモン」を生んでいるのではないか。ここから、自分をありのまま認めることへと向かっていく。たとえば、トポロジー(位相幾何学)の理論によれば、同じ穴のあいたコーヒーカップとドーナツは、同じ物となるが、この理論

を援用し、自作の「マスク」も「絵画」も同じだと認めるくだりは、筆者が「モンモン」も「絵画」も同じ自分のものとして受け容れるにいたったことを示している。そして、筆者が求めているのは実感（リアリティ）であり、「絵画」を描くことは「魂」の問題なのだとする結論は、筆者が彼女なりの答えを手にしたことを物語る。

あり余るパワーと自分をもて余し気味だった筆者が、自らの「モンモン」と「絵画」に正面から向き合って得た答えは、なお現時点でのという注釈付きかもしれないが、答えの当否以上に、自ら格闘してそれを手にしたことに意味があるだろう。高いモチベーションとリアリティによる、作家らしい学位論文として、審査員一同の好感と高い評価を得た。

（作品審査結果の要旨）

渡邊は、描く行為としての絵画を半立体的マスクに展開したなかで、絵画における身体性と精神性を西洋絵画のアカデミズム的側面に限定し創作研究をおこなってきた。博士作品においては、油絵具による絵画表現の可能性をイメージの再現からイメージの発生に展開している。

作品は、絵画の存在そのものを思考するものである。光、時間、次元を絵画の存在に関わるエレメントとして制作活動をおこない、伝統的ともいえる絵画様式から、これまでにない独自のイリュージョン性を可能にした絵画世界を確立することに成功している。宝石や抽象的文様にも似た形態が構成され、一枚一枚の作品が独自の絵画空間を構成し、渡邊の持つ絵画観を明瞭に提示している。

彼女は憧れをもって表現を描き続ける。きっと満足感も終わりも無いのだろうが、無心に憧れに向かっていく。作品では、憧れのイメージに向かって描かれる最初のストロークから、次第に具体的イメージが形成され、個々のイメージが構成されていく。一つの細胞が分裂と結合を繰り返していくように、ストロークから具体性が発生し、無限の密度を構築していく。彼女の制作行程には、生の起源と成長を思い浮かべる。何も無い画布に、なんのイメージも持たないストロークが現われ、成長する中で分化していく。カオスとフラクタルの関係のように、それぞれの機能は何らかの法則により組織化され、全体の一部となり、絵画は全てを包括する。そして、一つの絵画世界がそこに現われる。時には、全体が現われ得ないことも有る。彼女の言葉を借りるならば、「カタストロフィー」が起きていない状態である。自分の思考や力では解決できない「カタストロフィー」が起きることを求めて描き続けるという。自己の法則に縛られること無く展開していく渡邊の作品には、観るものを飽きさせない無限性と、確固たる絵画世界の存在が備わっている。

博士作品として提出された作品は、いずれも渡邊独自の絵画世界を提示するものであり、その画格、表現力ともに稀に見る資質を備えている。日本における油画の新たな可能性をも感じるものであり、博士の学位を認めるに相応しい優れたものであるという評価で全員一致した。

（総合審査結果の要旨）

渡邊妥翁子は、東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程絵画専攻の学生として、「マスクのオブジェから絵画における宇宙観」を大きなテーマとして制作を行っている。随分と大胆なそして意表をつく学位論文題目である。だが、本論全文を貫くみごとな文章展開と内容の濃さは、作品もそうであるように他に類をみない。筆力には脱帽である。

学部一年、二年の頃は落ち着きがなく、作品も同級生のレベルからはほど遠かったように思われた。三年生の頃の批評会でようやくマスクを創り出した。工芸科の鋳造にも通っていたという。それからは

何か吹っ切れたようにもくもくと制作し出した。卒業制作では具体的ではないが、軟体動物のようでもあり、鉱物のようでもあり、魚類のようでもある、絵画による支持体をエイのように湾曲させた半立体作品を制作した。

湾曲された造形は「マスク」となって出現した。杜賞を受賞することになる。

第1章ではマスクと仮面の違い、絵画中心の自分の価値観の外に出るという「モンモン」と「こっけい」の両論を軸に、第2章では実体験に基づく主観的視点からの絵画観、絵を描くに至るきっかけとなるものを論じた。ここでは意外にもレンブラントやファン・アイクの15～17世紀の作品と比較、共感することを述べていてその比較がおもしろい。こういう古典的な手法の装飾品に描かれたものに興味を持つ。

第3章では哲学の間から自身の作品分析を計る。哲学の領域からモンモン分析を計るところに彼女の非凡さがある。私にはデカルトのところを論じた箇所が一番興味深かった。

第4章では彼女の作品の根底に流れるカタストロフィー（驚異の反転）、この驚異の反転こそ、モンモンから逃れ、解放される到達点なのである。第5章では描き手としての芸術表現はかくもこっけいで複雑な面をみせる。そのせめぎ合いの中でもがく過程こそが彼女の生きている証の作品なのである。

結章では、筆者が考察してきた一般常識という言葉はあまり意味をなさない。

大げさに言えば筆者そのものが作品であり、そこで葛藤し生み出される作品こそが表現である。

筆者の個人的な制作上の生みの苦しみを、モンモン体験とかこっけいとか、自身で揶揄する表現を使っているが、でき上がった作品自体はどこにもそれらしき苦悶は見えず、むしろ心の苦しみやおかしみを巧みな技術で転換させ、黒褐色の中に描かれた世界は観るものを魅了する。

作品審査及び論文審査とともに、絵画領域のそれぞれの表現分野の審査委員と、論文審査委員の数回にわたる議論の上、厳正な判断のもとに、本論文は博士の学位論文に相当するものであるとして、全員一致の上、合格と判断することにした。